

地域公開参観日校長講話

平成 30 年 5 月 26 日

本日の内容はこの 4 つです。

- はじめに
- お母さんカモと 13 羽のヒナたちの映像
- お別れの前に（朝の昇降口で）
- お月様が見ているよ

キーワードは「親子」です。

「お別れの前に」「お月様が見ているよ」は、「親が子どもに残すもの」をテーマに昨年 4 月から今年 4 月の PTA まで、計 3 回、お話しをしてきたシリーズの続きです。

最初に TV や新聞で話題になったカモの赤ちゃんの映像をごらんいただきます。今日お見せするのは、ケーブル TV の映像です。



これは、戸倉小学校の児童昇降口でほぼ毎朝見られる心暖まる親子の光景です。

4 月特に 1 年生は、小学校という新しい環境で、お家の人と離れることに不安を抱えるお子さんがいます。そういう時にはその子に寄り添っていくことが大切です。

この子は、ギュッとしてもらい、時にはほおずりをしてもらいます。この子は「お母さんのにおいがする」と言うんだそうです。だから、においをつけてあげるという意味ですりすりしたりするのだそうです。すると、この子は「これでよし」という感じで教室に向かいます。お友だちや先生が手を引いてくれることもあります。教室では、担任の先生が待っていてくれています。たっぷり甘えて心が満たされる。お母さんが見えなくなっても、見守られているという安心感があるから教室に向かえる。お母さんの姿、手をさしのべる先生や子どもたちの姿に気持ちが温かくなります。

実は、学年が進んでも大切なのです。甘えさせてあげるときは、たとふりと甘えさせて心をもたしてあげる。いつでも見守られているという安心感で満たしてあげる。そんなことをこのお母さんから改めて教えられました。

「お月様が見ているよ」は、校長講話で子どもたちに話したものです。

「どろぼうの親子」毛涯章平『ふきのとうの饞別』>より あらすじ

あるところに泥棒がいました。昼間はごろごろしていて夜にお百姓さんが育てた作物をぬすむなどしていました。その泥棒には一人の男の子がいましたが、お父さんが泥棒であることは知りません。

ある月の明るい夜に泥棒は、男の子に泥棒のやり方を教えようとスイカ畑にやってきました。泥棒は、男の子に、だれか来たら合図をするように伝えると畑のスイカを取り始めました。泥棒が、「だれか見ていないか？」と尋ねたとき、男の子は、「誰もいないよ。でもお月様が見ているよ。」と答えたのです。



これを聞いた泥棒は、はっとしてかごの陰にかくれました。やがて取ったスイカを畑に戻し、男の子の手を引いて家に帰りました。泥棒はお月様の顔を見ることはできませんでした。

翌日から、この泥棒は盗みをやめて、毎日せっせと働くようになりました。

子どもからはこんな感想が出ました。

- お父さんは、最初は悪いことをしていたのに、畑仕事をするようになって、盗みをやめたので、男の子はすごい。
- 子どもはどろぼうになりたくなくて、お月様が見ている といったのかもしれない。



校長からはこのようなことを伝えました。

- 「泥棒なんかしていてほんとにいいのかい」「そんなことしていて恥ずかしくないのかい」そんなもう一人の自分の声を聞いて、「こんなことをしていちゃいけない」って思ったのではないのでしょうか。
- 校長先生もお月様のようなもう一人の自分をいつも心の中に持っていたいと思いました。

5年生からはこんな感想をもらいました。

- お月様は神様なのかもしれない。お月様はいつも僕達をみているんだなあと思いました。

お月様は、自分のことを良いことも悪いこともいつも見ていてくれる存在、すなわち、お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃんといった家族なのではないでしょうか。



<校長講話を聞いてくださった方の感想>

- うちの子は、なんでも家で話します。校長先生に話していただいたように、このような気持ちを育てる学校生活に期待をしています。今日の講話のことを家で子どもに伝えたいと思います。
- いいお話でした。特に朝、子どもと別れるときのお母さんの姿が心に残りました。